長岡税務署長賞

支え合い

長岡市立南中学校
二年　関　翼

私が税金という言葉を初めて知ったのは小学四年のときだ。テレビに映っていた、アフリカの国。そこには、学校に行きたくても行けない子供たちの姿があった。学校に行くお金がない。そもそも、学校がない地域もあった。もちろん、教科書なんてあるわけもない。日本の子供たちは、当たり前のように学校に行き、教科書を使って勉強ができる。私はとても幸せ者なんだな、と思った。だから、

「毎年、教科書を買ってくれてありがとう。」

と母に言った。すると、

「お母さんが買っているんじゃないのよ。」

という当時の私には意味が分からない答えが返ってきた。

「税金で買ってもらっているの。」

税金？小学四年の私には、税金がどんなものか全く分からなかった。学校に行けるのも、教科書があるのも、税金というもののおかげだなんて。しかし、私にとっては、かなり衝撃的な発見だったにもかかわらず、その後、税金のことはすっかり忘れてしまっていた。

今年、私は「租税教室」を受けた。そこでやっと税金の仕組みを理解したと同時に、税金なしでは暮らしていけないことを痛感した。例えば、私がよく利用する図書館。学校で読む本はもちろん、旅行に行くときのガイドブックも図書館でお世話になっている。また、私は小さい頃、体が弱くほとんど毎月病院に通っていた。医療保険に本当に助けられた。こう考えてみると、私だけでなく誰にとっても、税金は暮らしに欠かせない存在だということがよく分かる。私に税金のありがたさを教えてくれた「租税教室」だが、私はもっと早い時期に「租税教室」を受け、小さいうちから税金についての理解を深めたかったなと思う。もっと早い時期に受けていれば、身近なものはほとんど税金が関係しているという重大な事実を知ることができたからだ。そして、これほどお世話になっている税金なのだから、自分も将来しっかり税金を納めよう、という気持ちに誰もがなるのではないか。

私はこの夏、一週間程入院して手術を受けた。検査に次ぐ検査で、多大な費用がかかることを覚悟していた母だったが請求書を見て、

「え!?いつもと同じ金額でいいの!?」

とびっくりしていた。ここでもまた税金に助けられた。病気になったとき、金額のことでためらわずに病院に行けるようにしたり、人々が安心して生活を送れるようにするためには、税金は必要不可欠だな、と強く感じた。

今回の体験を通して、いかに税金がありがたいものかを心にしみて感じることができた。人生百年といわれる時代で、早くも税金に支えられっぱなしの私である。今後年を取るにつれ、ますますお世話になるだろう。その恩返しをするためにも、私は将来、当たり前のことかも知れないが、きちんと税金を納めて、社会に少しでも貢献できる大人になれるよう努力していきたい。